

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	和田 理寛
論文題目	モン民族宗派の解体と形成 —タイとビルマにおける国家僧伽の形成と少数民族—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的はタイとビルマ／ミャンマー (本論文は、主として「ミャンマー」へ改称する以前のビルマを対象とするため、以下「ビルマ」と記す) の二国における上座部仏教僧伽と民族の関係について、少数民族モンの事例から論じることである。具体的には、モンの「宗派」 (ニカーヤ) の変遷について、なかでも僧伽制度の転換期の経緯に注目しながら、その形成や解体の過程を解明する。主な問いは次の二点である。第一に、上座部仏教国タイとビルマにおいて僧伽制度の主軸である出家者の組織化と教学試験の変革は、両国それぞれのモン僧伽に対して、さらにはモン民族全体の在り方に対して、どのように影響を及ぼし、何をもたらしたのか。第二に、国家仏教の模範ともいえる聖典や戒律を重視する「厳格派」と、国民同化政策とは相容れない少数民族の「民族派」とが混合した「モン系タンマユット」という両義的で特殊な宗派が成立した経緯とその後の変遷を辿り、両国の僧伽制度や他のモン在来宗派との関係について、資料と聞き書きをもとに解明する。それにより、両国の僧伽制度を通じて少数民族政策を再考し、モンの現状や変遷を俯瞰し、これまでとは異なる視点からタンマユット派を含む両国の僧伽の歴史を捉え直す。</p> <p>序章 (第一章) では、まず、従来の民族論における範疇論への偏向を是正するために、本論文では民族の集団としての諸相に取り組むことを述べる。続いて、モンに関する先行研究に触れ、モン僧伽が文語の使用や教育に関わる重要な役割を担ってきたにもかかわらず、これまで研究対象としてあまり注目されてこなかったことを指摘する。そして、最後に本論文の背景となるモンの略史や人口分布といった基礎的な情報を概観する。</p> <p>第二章は、まず上座部仏教の「宗派」について、出家の系譜 (戒統) を重視し自らの厳しい実践を正しいとする「厳格派」と、俗語の違いに基づいた「在来派」 (民族派) の二つに分ける枠組みを提示する。続いて、タイ国の近代化政策の中で制定された僧伽統治法 (1902年) による中央集権的な僧伽統治制度導入がモン在来派に与えた影響を論じる。この制度転換以前は、「モン管区」の首長や管区次長は高い位階を与えられ、少数民族のなかでモン僧伽だけが個別の僧伽行政と教学試験を認められていたが、これは1912年には廃止され、モン式誦経は漸次的衰退を経て、現在、民族僧伽としての枠組みは曖昧となりつつある。</p> <p>第三章では、前章の制度転換期の前後において、モン僧伽がいかなる集団であったのかその実態を検証する。モン管区は全体として一枚岩ではなく管区内の要職者間には確執があった。さらにこの確執を逃れた第三の勢力がタンマユット派に参加し、「変更モン」と呼ばれた。変更モンは独自の具足戒式を伝える「宗派」として2002年まで存続した。こう</p>			

した展開を辿ることで、少数民族僧伽の動きを単純に国家との二項対立として捉えることはできないことを示す。

第四章はビルマのモン系タンマユット（マハーイェン派）について開祖の人物像を中心に、その成立の経緯を同時代資料から明らかにする。そして同派は組織的なタンマユット派布教の結果ではなく、開祖個人の個性を軸とした越境的活動によって生まれたことを示す。

第五章はビルマにおけるモン諸宗派の変遷を追う。ビルマの国家教学試験においては少数民族言語のなかで唯一モン語だけが使用を認められている。しかし1980年代、教学試験にビルマ語能力試験が追加されるとモン在来派のなかから反発が生じ、代わりに同派独自の試験が受験者を集めるようになった。この運動を通じてモン在来派は、結成が認められていない非公認宗派でありながら、多くの成員を定期的に結びつける汎民族的な結節点を形成することになった。また他のモン厳格派二派もこれに追随し、各派独自の教学試験を実施している。

第六章では、両国における世俗のモン語教育運動を比較する。まず、タイで民間の活動としてのモン語教育は成功していない状況を明らかにする。一方、ビルマについては、既存研究で注目されているモン語教育運動としての民族学校に対して、ここでは出家者主導によるモン語夏期講習に注目し、その制度的発展の経緯を追う。これらモン語教育運動は国の制度と競合的共存を目指す点で、ビルマのモン僧伽による各派教学試験の活動と共通点があることを指摘する。

第七章（結論）では、以上の論点をまとめる。

モン僧伽は国家の僧伽制度のなかで唯一特別な待遇を受けてきたために、制度の転換が少数民族にもたらす影響や反応について考察するうえで不可欠な事例である。モン在来派は、こうした制度転換を通して両国の間で対照的な過程を経てきた。タイでは公的な僧伽組織から排除されたが、反対にビルマでは自発的に汎民族的な制度作りを進めてきた。また、同化と抵抗をめぐる対照性の要因としては、公的な独自の僧伽組織の存在よりも、教学試験と民族言語の使用の重要性が明らかになった。

今一つ重要な論点として、両国それぞれ別の文脈のなかで形成されたモン系タンマユットの展開から、モン系宗派の両国における位置づけを導き出している。タイでは制度転換期におけるモン僧伽内部の分裂が契機となったのに対し、ビルマでは越境する開祖個人が両国の有力者から支援を得て教学活動などを展開したことが同宗派の端緒となった。ただし、出家の系譜を重視する立場は共通しており、結果として萌芽期のタンマユット派がモン僧伽に求めた戒統を逆輸入する形となった。そしてこの系譜の重視を軸に、タンマユット本流ともモン在来派とも異なる個別の「宗派」として、タイではタンマユット内部で半ば公認を受け、ビルマでは公認九派の一つとして認められてきた。

(論文審査の結果の要旨)

モン (Mon) は、タイ系やビルマ系諸民族に先立ってこの地域に文明を築き、仏教を受け入れてきた民族である。しかし、これまで歴史学においても、人類学・民族学においても、モン民族やその仏教に関する研究は限られていた。その理由としては、モンの場合、多数派民族とその国家への同化と統合の度合いが顕著であるため、少数民族としての輪郭を描き、従来の少数民族論の問いや枠組みを適用して、議論の俎上にのせることが困難であったことがあげられる。また、モンの歴史的変遷、特にその仏教組織を研究するには、タイ語、ビルマ語の両言語、更にはモン語の能力が必要とされ、言語習得の要請という敷居が高かったことも指摘できる。本博士論文は、そのような困難に敢えて挑戦し、両国のモン僧伽のたどった歴史と国境を超えた関係を、丁寧に追った貴重な学術的成果とみなすことができる。

本論文は、タイ・ビルマ両国における少数民族モンの仏教僧伽の展開過程を中心に、民族と国家の関係を問うものである。特に、上述の三つの言語に習熟し、これを文献および現地聞き取り調査において駆使しえたことで、両国の僧伽組織全体の展開を理解する上でも重要な、モン僧伽の知られざる実態や変遷に迫っている。その学術的価値は、研究蓄積の少ないモンについて、特に、その僧伽組織に関して多くの新たな知見を提供し、モン僧伽の全体像を提示し、それにより、タイ・ビルマを中心とする上座部仏教の理解、特に僧伽組織を通じた国家と民族の関係の理解に、新たな視点をもたらしたことである。具体的には、以下の諸点があげられる。

第一に、タイ国に関しては、ラーマ五世王期を中心にモン宗派の盛衰について論じ、1902年の僧伽統治法を契機に、国内の仏教教団が中央集権的に画一化されたという従来の単線的な図式の相対化に成功している。タンマユット派といえ、これまで、合理主義や厳格主義の名のもとに国家による一元的同化政策の尖兵をつとめた宗派として理解されてきた。しかし本論文は、そのタンマユット派の内部に、実はごく近年まで、モン系タンマユットという、雑種ともいえる民族派が含まれていたという事実と、そこに至る過程を明らかにしている。また、モン宗派内部の複雑な戒統と組織の相互関係を、丹念な文書資料の渉獵によって詳らかにすることで、こうした内部事情がモン系宗派のタイ行政との関係や、上述のモン系タンマユットの展開に大きく関与していることを指摘し、僧伽の国民化過程は、国家と少数民族の対立という図式のみでは描ききれないことを説得的に論じている。

第二に、ビルマにおける公認仏教宗派であるモン系タンマユット (マハーイェン) 派の展開について、タイ公文書館の同時代関連資料を初めて用いて追跡している。そして同派がタイ出身のモン僧侶による越境的布教活動を発端に確立したことを明らかにし、これまで知られていなかったその開祖の事績と、同宗派のビルマにおける位置づけや、

他のモン宗派との関係を解明し、同国におけるモン僧伽の全体像を提示している。

第三に、ビルマ中心主義的な国家僧伽制度にあって、モン語で教学試験を行うことが許されているという事実を明らかにし、その展開を追っている。タイでは、二十世紀初頭に既にモン語を用いた教学試験は廃止されていたが、ビルマ側ではそれが今もって実施されているという重要な事実は、外部の研究者には認知されてこなかった。また、教学におけるモン語へのこだわりをもとに、汎民族主義的運動が生じ、教学試験の言語使用をめぐる、モン宗派が独自の試験制度を展開してきた過程を検証している。そしてこれまで研究対象とされたビルマの他の少数民族の場合とは異なり、教学試験や僧伽組織を全く独自に確立するのではなく、あくまでも、ビルマの国家教学試験を重視しながら、その中でモン語の位置づけを確立してきたという、ビルマ仏教におけるモンの独自の立場を指摘している。

第四に、ビルマとタイの聖俗両界におけるモン語の教育と使用を比較している。僧伽においては、モン語独自の誦経発声法を保ったモン宗派による汎民族主義が展開されるビルマと、そうしたモン僧伽が希薄化するタイとの対照を描き出している。一方、世俗においては、ビルマでは出家者が先導して進める世俗界のモン語教育に注目し、自民族や自言語への愛着を生起させる運動を展開していることを論じている。現在、ビルマの民族言語教育政策は、アカデミズムの内外で関心を集めているが、その中でも先進的な事例としてモンの実態を現地調査に基づいて明示している。一方、タイでは、世俗のモン語教育の試みはあるものの、十分に効果をあげていない。本論文は、このように言語使用や教育を通じて、両国における民族集団としてのモンの現状と相違を浮き彫りにしている。

こうした点により、本博士論文は、これまでその全体像の把握が困難であったタイとビルマの少数民族モンとその仏教について、僧伽組織の変遷と言語教育にかかわる丹念な実証研究を通じて見取り図を描き、それと同時に、制度の変遷や僧伽のあり方の理解において、多くの重要な新事実を見出している。単一民族の研究の域を超えて、両国の僧伽の理解を刷新し、タイ・ビルマ両国の仏教組織の研究に風穴をあける、オリジナリティの高い論文であると評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年3月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。